

# ワークシェアリングと人々の暮らし

—大分県姫島村を事例に—

別府大学国際経営学部

准教授 池口 功晃

## はじめに

地域社会研究センターは、平成27年3月9日から2日間の日程で大分県北の姫島村を調査した。同村は公共セクターの「ワークシェアリングモデル」や姫島方式と呼ばれる「地域包括医療・ケアシステム」で全国的に知られ、少子高齢化・過疎化対策に真正面から取り組み、独自の自治体経営を実践している。「地方消滅」が叫ばれる昨今において、同村の調査を通じた自治体経営や村づくりのあり方を議論することは大変意義深い。今回は初日に姫島村役場を、2日目には姫島村商工会を訪問した。本稿ではその調査結果を報告する。



大分県姫島村の位置 (筆者作成)

## 姫島村の小地誌

姫島村は大分県北の国東半島から沖合5kmの海上に浮かぶ面積約7km<sup>2</sup>の島である。島はもとも幾つかに分かれていたものが砂州で繋がることで形成されたが、島の人々の暮らしの中心となる施設や住宅の大部分がこの砂州上に立地している。人口は約2,200人（平成26年4月）を擁し、主な産業は沿岸漁業と車えびの養殖であるため、姫島村の漁業従事者は全就業者数の約3割にも及ぶ。

姫島村は古事記や日本書紀にもしばしば登場するが、その理由の一つは島の北西部の観音崎で黒曜石が産出することによる。縄文時代には姫島の乳白色の黒曜石が島外へ運び出され、矢じりや石斧に姿を変え、これらが南は鹿児島県の種子島、北は大阪府に至るまで広範囲の遺跡で発掘されている。また、姫島には9つの火口跡（達磨山火口、北火口、東火口、観音崎火口、北浦火口、城山火口、浮洲火口、金火口、稲積火口）があり溶岩ドームなど貴重な火山地形のほか、層内褶曲<sup>1</sup>と呼ばれる珍しい地層を見ることができると、専門家の間では地層の宝庫と呼ばれ、平成25年には「おおいた姫島ジオパーク<sup>2</sup>」に認定された。

姫島は伝統行事においても全国的に知られている。鎌倉時代の念仏踊りに端を発すると言われていた「姫島の盆踊り」の期間中は多くの観光客が押し寄せ、北浦地区の青年男女によって踊られる「アヤ踊り」や松原地区の青年男女によって踊ら

1 二つの硬い層に挟まれた軟弱な層が、地殻の変動等により唐草瓦のような模様として連なった地層をいう。

2 ジオパークとは、地形や地質に関する素材について、その成り立ちなどの調査研究を行いながら教育活動、観光、ツーリズムにも同時に活用し、地域の持続的な経済発展を目指す仕組みをいい、日本では一般に「大地の公園」と呼ばれている。

れる「銭太鼓」のほか、「猿丸太夫（さるまんだゆう）」や「タヌキ踊り」が披露されるが、中でも独特の可愛らしい化粧とユーモラスなしぐさで踊る「キツネ踊り」は人気が高い。これらが開催される8月14日、15日の両日は、村営フェリーの夜間臨時便が運航されるほど島は賑わいを見せる。平成24年に姫島の盆踊りは「国選択無形民俗文化財」に選択された。



「おおいた姫島ジオパーク」の案内板  
(国東半島、伊美港にて) (筆者撮影)

## 姫島村のワークシェアリング

姫島村は昭和40年頃からワークシェアリングを実施している。当時は昭和35年頃から始まる高度経済成長期の真っ只中であり、一般にワークシェアリングなる言葉もなければ、そのような発想もない時代である。しかし、やがて訪れるであろう将来の人口減を予測し、姫島村は独自の村づくりを進めてきた。その一つが、今でいうワークシェ



ワークシェアリング等の説明を受ける研究員(姫島村役場にて)  
(筆者撮影)

アリングである。姫島村の場合、全就業者の約5人に1人が村役場に勤務していることから行政機関が最大の雇用体である。そこで、できるだけ多くの職員を雇い人口流出を防ぐため、(i) 職員の給与を四級制<sup>3</sup>にして低く抑えつつ、(ii) 一部の職員を対象に、給与および勤務日数をそれぞれ3分の2にする政策を実施している<sup>4</sup>。(i)については、ラスパイレス指数に見て取れる。ラスパイレス指数とはドイツの経済学者が提案した物価指数を表す一方法であるが、日本では国家公務員と地方公務員の基本給与額を比較する指数として用いられることもある。姫島村のラスパイレス指数は78.6で、全国で最も低い数値である。これは換言すれば、最も公務員の給与が低い自治体ということになる。

## 村民の豊かな暮らし

このような給与水準の実態を垣間見ると、人々の日々の暮らしが大変厳しいように思えるが、実はそうでもないという。現金収入は確かに他の自治体に比べて少ないが、例えば、海で余計にとれた魚や、村の各々の畑でとれた野菜を皆で分け合うことで、食糧の一部は島全体で自給自足している。また医療に関しても、昭和58年から自治医大卒業生の県からの派遣制度が始まり、島に密着した医療サービスを提供している。姫島方式と呼ばれる「地域包括医療・ケアシステム」では一時医療だけでなく、村民の健康を守るための保健予防活動までも行うことになっている。

環境面に関しても、村では昭和59年から「デポジット制度」を採用している。これは村内に空き缶が散乱することを防ぐ目的で、飲料店で販売する缶飲料に10円の預り金を上乗せして販売し、飲んだあと空き缶を販売店に持ち込めばその場で10円を返却するという制度である。この制度は村民にも十分浸透し、環境美化が一層進んでいるようである。また、情報化時代に対応するため、平成16年には村内全域に光ファイバー網を設置し、

3 大分県の他の市町村では七級制にしているところが多い。

4 このような雇用形態は平成18年度からとられてきた。

「ケーブルテレビ姫島」を開局している。当局では多チャンネルを受信できるほか、村内の行事、ニュース、海の状況やフェリーの運航状況などが放映され、村民の加入率は96%を超えている。

## 自治体合併の見送りと村民の絆

姫島村では昭和30年以降、村長選において約50年近く無投票当選が続いている。この背景には最後の選挙となった昭和30年に村内を二分する激しい選挙となったことが大きく影響を与えている。人口約2,000人の村であるからこそ、村民のまとまりや助け合いの精神が大切であることを村民はあらためて認識したに違いない。また、いわゆる「平成の大合併」と称される平成17年の自治体合併では、数多くの全国の自治体が周辺の自治体に吸収合併され、大分県では58市町村が16市町村へと再編された。しかし、姫島村は周辺市町村との合併を見送り、独自の村づくりを進めた。その主な理由は、姫島村のワークシェアリングの維持が困難となる恐れがでてきたためである。周辺市町村のラスパイレス指数は95以上であり、姫島村のラスパイレス指数を受け入れることができない可能性が高く、また地域医療や社会資本の整備が後退する可能性が高かったためである。

## おわりに

今回の調査で最も印象的だったのは、姫島村役場を訪問した時である。一般に若い人は島外へ出るケースが多く、姫島村も例外ではないと高を括っていたのだが、一階には比較的多くの若い女性が勤務していたため驚嘆した。しかし、姫島村ワークシェアリングの説明を受け、島の理解が進むにつれてその意味がわかるような気がした。人々が暮らす上で、姫島村は決して収入面で豊かとは言えない島である。しかし、村民が絆を大切にし、それを行政が具体的な施策で後押しするが故に、この島は村民にとっても島外の人にとって

も魅力が尽きない島であると理解できるようになった。これからも姫島を応援し、姫島の魅力を伝えていきたいと思う。



島の西部にある観音崎より西浦に夕日を見る。  
(筆者撮影)  
(150年前、4ヵ国連合艦隊が下関を砲撃する前に停泊した海域)

### 【謝辞】

この度の調査に当たり、姫島村総務課長の林義虎氏、姫島村商工会の宮崎洋氏の他、たくさんの方々のご協力を頂きました。ここにあらためて感謝申し上げます。また、今回の姫島調査を大変楽しみにしておられた別府大学短期大学部地域総合科学科教授の梶原博先生が、ご病気のため調査に参加されず、その後永眠されました。生前の先生のご厚情に深く感謝申し上げます。

### 【参考文献】

木野村孝一（2011）『姫島の歴史—ロマンあふれる島への誘い—』（プランニング大分編）  
姫島村役場（2014）「姫島村の概要」